

◆パネルディスカッション 「地域資源との連携で深まるアクティビティ・ケア」

〈パネリスト〉 綿 祐二 (文京学院大学 人間学部人間福祉学科 教授)
 篠塚恭一 (NPO法人日本トラベルヘルパー協会 理事長)
 多田千尋 (高齢者アクティビティ開発センター 代表)
 〈コーディネーター〉 馬場 清 (高齢者アクティビティ開発センター)



綿祐二氏

綿先生には施設が地域の一員になるためのさまざまな秘策をお聞きしました。

先生が運営されている施設の庭では、毎年地域のお祭りが開催され、1日で2500人もの人たちが訪れるそうです。ここで重要なのは、ニセモノの「施設のお祭り」ではなく、地域の「本物のお祭り」が施設の庭で行われる、という点です。もちろん屋台では、その道のプロが作る、本物の「縁日の焼そば」を食べられます。利用者にお祭りの楽しさを味わってもらいたいと思う時、とかく施設内でお祭りをしようと考えてしまいがちですが、スタッフは大変ですし、なにより本物の楽しさにはかないませんよね。

施設側には地域構成メンバーの一員となる「権利」と同時に「義務」があります。地域の資源を得るためには、例えば福祉や介護に関する知識を地域の人に伝え、悩み相談を受けたり、買い物には地域の商店街を積極的に利用するなど、施設ならではの資源を上手に地域に提供することが大切です。施設側と地域の人たちが双方向にコミットし、意識改革をしていくことが、地域に開かれた施設になるために重要だとおっしゃっていました。

続いてご登場いただいた篠塚氏は、ホームヘルパーとツアーコンダクター両方の知識と技術を持ち、外出先でのケアと楽しい旅を演出できる「トラベルヘルパー(外出支援専門員)」の養成をされています。

春はお花見に、お彼岸にはお墓参りに行くという日本人としてあたりまえのことから、憧れの土地への旅行まで、その支援の幅は広く、車椅子で行ける場所を選んで出かけるのではなく、「行きたい場所」に車椅子で行くにはどうしたらいいのかを考えるのがトラベルヘルパーの役割なのだそうです。露天風呂の大浴場での入浴介助や、神社仏閣の玉砂利が敷かれた悪路で車椅子を押すこと、現地での医療サービスの手配もします。旅は非日常を楽しむものではあるが、要介護者の旅行の場合は、日常と変わらない配慮をする部分も必要で、見極めが重要だとおっしゃっていました。



篠塚恭一氏



多田千尋代表

今まで様々な施設を視察してきた多田代表からは、地域と手をつなぎ、地域の人々が集うようになった全国各地の施設でのエピソードが語られました。

「子どもからお年寄りまでが集うエリアにしたい」との思いから、精神病院のロビーに開かれたおもちゃ美術館では、保健所の母親学級が開かれるようになり、赤ちゃんを連れてお母さんたちが集まるようになりました。赤ちゃんは「いるだけボランティア」という言葉のように、赤ちゃんを見た患者さんの様子が一変、世話を焼きはじめたそうです。ケアされる側だった患者さんが、ケアする側に変化した瞬間でした。

施設にはデイルームや食堂、庭など、多くの人が集えるスペースがあることや、厨房があって料理人がいることを有効活用し、まずは地域の活動に会場として貸出すことから始めてみてはいかがでしょうか?という提案がされました。

交流会

1日目の夜の交流会には多くのアクティビティ ディレクターと講師陣が入り交じり、同窓会のような賑わいでした。あちらこちらで「久しぶり!元気〜?」という声や、近況を報告しあう声が聞かれました。また、アクティビティについて相談しあったり、受講した期を超えて同じ地域の人同士がつながり合うなど、AD同士の交流の場の重要性を感じました。



人をむすぶ器たち「てまる」

今回、展示即売会という形で、岩手で作られている福祉食器「てまる」をご紹介します。使い勝手を考えた福祉食器でありながら、機能性だけにとらわれず、器として美しく上質な日常品であることを基本概念として開発された食器です。

みなさんこの食器に興味津々な様子で、お米や豆の入った器ですくいやすさなどを試していました。



次回
開催日が
決定!!

第2回 アクティビティ・ケア実践フォーラム

日程：2011年10月29日(土)・30日(日)

会場：立教大学池袋キャンパス (東京都豊島区池袋)

自慢のアクティビティを披露してくれる方募集!

手工芸・体操・音楽・美容・園芸など、普段行っているアクティビティを持ちよって、学びあい、意見交流しませんか? 他のADや講師からのアドバイスももらえるチャンスです。次回(4月)の会員発送時に、分科会講師のエントリーを募集します。